



信長と連歌師の宝

関係する事柄の解説<stage1用>

1. 戦国時代から江戸初期の頃の小牧

小牧は、15世紀には清須を中心とする尾張の交通の大切な場所でした。

1563年、織田信長は美濃を攻めるための拠点として小牧山に城を作り、山の南に城下町を作りました。1567年に信長は稲葉山城（岐阜城）に移りましたが、町はそのまま存続しました。

1584年、豊臣秀吉と徳川家康との対立から「小牧・長久手の戦い」がありました。このとき、家康は小牧山城を改修して使用し、秀吉は犬山城に入りました。戦いは、小牧山城と岩崎山砦との対立などの布陣から始まり、長久手地域での戦闘へと展開していきました。

1623年、木曾の山林を持っていた尾張藩は街道を整備し、小牧山のみもとにあった町を現在の市街地（当時は原野だった）に移して新たな宿駅を作ることにしました。この移転には約10年かかり、ここに「小牧宿」が誕生しました。

2. 小牧宿

小牧宿は木曾街道（上街道）に沿って町並みが作られました。街道は現在の市街地から入って突き当たりの戒蔵院を東に行き、ラピオ西の交差点を曲がって北に向かっていました。

3. 連歌

和歌から発展した伝統的な詩歌の形式で、多人数による連作を基本とします。室町時代から江戸時代初期には盛んに歌会が行なわれました。1つの句を五七五または七七とし、1人が1句ずつ前の句につなげて詠み、百句をもって1つの作品（これを「百韻」と言う）とするのが一般的でした。

4. 里村紹巴

戦国時代の連歌師で、多くの久家や武将との交流がありました。伝説によれば、小牧山城築城の折、織田信長が里村紹巴を呼んで祝儀の歌百韻を催したとあります。信長から発句を求められた紹巴が「あさ戸あけの麓は柳さくら哉」と詠んだところ、信長は「新しい城の竣工に」あける」というのは不吉だ」と機嫌を悪くしてなじったそうです。

このとき紹巴が泊まったとされる玉林寺の山門の前には、「居士紹巴之塔」があります。

5. 田縣神社

御歳神（素戔鳴尊の孫で五穀豊穰の神）と玉姫命（尾張地方開拓の祖神である大荒田命の王女で、子宝・安産の神）をまつています。春の豊年祭は、男性のシンボルをかたどった大男塙形の神輿で有名です。

6. 正眼寺

応永元年（1393年）に現在の一宮市に建てられ、元禄2年（1689年）に今の場所に移りました。国指定の重要文化財「銅造誕生釈迦仏立像」など、多数の文化財や史料を持っています。（多くは寺外の博物館や大学に寄託しています。）

7.尾張神社

古墳時代の豪族である尾張氏の祖先をまつています。神社のある小針地域は、むかし尾張村と呼ばれており、ここから「尾張」の名称が始まったとされています。参道入り口の鳥居の横には、「尾張名称発源之地」の碑があります。

8.名古屋コーチン

正式な品種名は「名古屋種」といいます。卵をよく産み、肉もおいしく、最も知名度が高いブランド地鶏として、多くの人々から愛されています。明治初期に、海部壮平・正秀兄弟によって、現在の小牧市池之内で誕生し、「国産実用鶏」の第一号に認定されました。

9.大泉寺

天正7年（1579年）に創建されたお寺です。名古屋コーチンを作った海部壮平の墓があり、山門にはその解説看板があります。

10.玉林寺

創建は天正年間（1573年～1592年）と考えられています。元々は小牧山のふもとにありましたが、小牧宿の建設のときに現在地に移りました。小牧山城の完成を祝う歌会に招かれた里村紹巴が宿泊したといわれ、山門前にそれを記念した碑があります。

